「少年の日の思い出」の謎について　「主題に関わる疑問点についての考察」

松田　寛

－場面構成のからくり＆作者を投影した登場人物とは－

「少年の日の思い出」の謎について

―はじめに―

六十年以上も前から「国語」の教科書に載せられ、今では、ほとんどの教科書出版社に掲載され、中学一年次の必修教材ともいえる「少年の日の思い出」。教科書に載せられているものであるから、作品論としても、かなり洗練・確立されているのかと思いきや、総じて何であるかという主題に関わるところに、どうもしっくりこない部分があると感じている。

授業者にとっては、主題が明確にならぬまま、教えているという不安定な状態である。それでも、主題らしきところを抑え、教えていくことになるわけである。

しっくりこないのは、どこかといえば、Aという主題らしき部分はあっても、それがBやC、はてまた全体とどう関係しているのか、ということが、つながらないところである。

作者は、何らかの関係性・関連性を脳裏に感じつつものを書いていると思う。まったく無関係であるものを書くことは少ないと信じている。仮にあったとしても、「無関係であること」こそが、のちには意味を持つように仕掛けて書くものであろう。「少年の日の思い出」には、その関係性、関連性といったつながりの解らぬ面が多く、作者ヘルマン・ヘッセがこの作品で、描こうとしたこと、うったえようとしたこと、そこにあるだろう一貫性を見つけるのが困難なのである。この構造がまず、大きな謎といえよう。

―個々（枝葉の疑問）の疑問について―

・最後に「僕」がちょうを粉々に押しつぶしてしまったのはなぜか？

・「それは僕がやったのだと言い、詳しく話し、説明しようと試みた。」ぼくが詳しく何を説明しようとしたのか？

・「エーミールは、激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く『ちぇっ。』と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていた」なぜ、エーミールは激怒しなかったのか？

これらの疑問については、その登場人物の心境に入っていけば、解決できるだろうし、これまでにも解説はなされているだろうからここでは述べようとは思わない。

―謎をつなぐもの―

わたしが疑問と思っているのは、次の二つについてである。

【謎1】「書き出しの部分（現在の場面）は、なぜ、存在するのか？」言い方を変えれば、「現在の場面で始まり、回想の場面を迎え、現在の場面に戻ることなく話が終わる構成上の疑問」ともいえる。

【謎2】「作者ヘルマン・ヘッセを投影する登場人物は誰なのか？」これは、主題と大きく関係するものと思われる。作者が何を描かんとしたのかという最大の疑問点へとつながる。

まず、一つ目の謎については、ヘッセの仕掛けであるとふんでいる。読者からすれば、現在の場面の「私」という登場人物が主人公で、概ね作者なのではないかと思って読み進めていく。しかし、場面は「客」の回想の場面へ入り、今度は「客」である「僕」が主人公となり、この「僕」こそが作者なのではないかと読者の意識を誘引していく。小説は「僕」がちょうをつぶした場面で終わることもあり、「僕」が主人公である印象を強く残すこととなる。この「僕」を中心に考察すると、当然のごとく、「初めて僕は、一度起きたことは、もう償いのできないものだということを悟った。」から、過去を変えることはできない、後悔・反省・戒め・教訓といった内容が浮かび上がる。

さて、ここで振り返ってみると、「僕」がしでかしたことについての後悔・反省・戒め・教訓を、本当に作者は「少年の日の思い出」で述べたかったのだろうか、と思うのである。なぜなら、前記の事柄を述べたいのならば、「僕は、八つか九つのとき……」（回想の場面）から描き始めればいいわけで、前半の現在の場面は必要ないではないか。それでも現在の場面がある理由について、主観的・感情的な話とならないよう、客観性を持たせるため現在の場面があると捉える意見もあろう。ならば、より客観性を出すために、もう一度現在の場面に戻せばよいのに、それをせず、なぜ、回想の場面のまま終わらせたのかという疑問は残ってしまう。

ひとつ叩けば、他の疑問が立ち上がるという、もぐらたたきの現象が次々と見えてくる。「私」という登場人物の存在位置が何とも不安定あり、それは、「私」が「客」に自分の過去の思い出を語る構成とせず、なぜ、「客」が思い出を語る形としたのかということにつきる。「客」に語らせる形をとった意味とは何ぞや。何らかの仕掛けを作者が組んだのではないかと思えてしかたないのである。符合しないからくりをたどり、一本の線に結ぶ方法はないのかと思ったのである。

「主人公を限定させない工夫」と言ってしまうと、ふりだしに戻ってしまった感がするだろうが、少し意味合いは違う。登場人物のほとんどが作者であるとしたらどうだろうか、という推測である。「私」も「客（回想の場面の『僕』）」も、はてまた「エーミール」も作者を投影する登場人物なのではと考えてみるのである。ここで、二つ目の謎「ヘッセを投影する登場人物とは？」とも絡み、何やらつなぐものが見えてきそうになってきた。【謎1】も【謎2】もまったく別個の問題点ではなく、相互に関係しあっている大きな枠組みの中でのからくりであったのだろう。

「私」と「僕（客）」が作者が投影されたものと捉えるところまではいいが、「エーミール」は違うと感じている人は多くいるだろう。そこを切り崩さねばなるまい。

―エーミールに見てとれる作者―

重要な登場人物であることに間違いはなく、「僕」を精神的に追い詰める模範少年「エーミール」は、「激したり、僕をどなりつけたりなどはしないで、低く『ちぇっ。』と舌を鳴らし、しばらくじっと僕を見つめていた。」や「僕は悪漢だということに決まってしまい、エーミールは、まるで世界のおきてを代表でもするかのように、冷然と、正義を盾に、あなどるように僕の前に立っていた。」の様子からわかるとおり、そこに権威を感ぜざるを得ない。その権威は「彼が、僕の言うことをわかってくれないし、おそらく全然信じようともしないだろうということを、僕は前もってはっきり感じていた。」からも読み取れる。「車輪の下」と同様、自分を理解しようとも、何事も決めつけてかかる教師をはじめとする大人達（「少年の日の思い出」では「大人びたエーミール」）に対する反発の念こそが、主題であるとる方がふさわしいはずだ。つまり、権威や圧力を用いて、自己を潰しにかかる社会を風刺したものと思えるのである。しかし、これが主題であるならば、この小説の構成はいったい何なのかと、まったくどうめぐりになってしまう。エーミールという「悪役」を作り出してまで述べるにしては、ピントのずれを感じずにはいれない。「僕」を主人公（作者）としたときには、あまりにもエーミールを悪い印象として、読者が受け取るような書き方となっている点である。「頭ごなしに決めつけ、陰険かつ冷徹で相手を理解しようともしない大人びた嫌な奴」といった印象を読み手の誰しもが感じずにはえない状況をである。作者（ヘッセ）からすると、これはフェアではないと分かっているはずだ。自分の犯した悪さはさておき、何も悪い行為は行っていない相手を非難する形で主張する手法をである。この手法が成立するのは、どういう状況下であろうかと考えてみる。やはり、エーミールも作者が投影された登場人物であるというところに落ち着く。自分のことを必要以上に悪く書くのであれば、多少自虐的にはなるが、アンフェアではなくなるはずだ。

では、エーミールに見てとれる状況が作者ヘッセにあったのかという新たな疑問が浮かぶ。事の真相はわからないが、それとほのめかす材料はある。左の写真はヘッセが愛用していた書き物机であり、その机にはヘッセが採集したものと思われるちょうの標本が立てかけられている。その標本の中に片羽のとれたクジャクヤママユがある。これが意味することは、「少年の日の思い出」の話に照らすと、潰れたクジャクヤママユが残っているとすれば、エーミールのところとなる。つまり、エーミール＝作者ということであろう。

―考察の果てに―

作者ヘッセが描きたかったのは、権威をもって人を服従させる社会、たとえ10％の白があろうとも、100％の黒として塗りつぶしていく強引なまでの世の中。頭ごなしに決めつけて、理解しようともせず割り切ることを強要する大人社会。おそらく、それはヘッセにとっては最も嫌う憎むべき姿であったに違いない。その憎むべき姿を自分がしていたとしたらどうであろう。ちょうを壊された経験の中でエーミールのような態度をとってしまう自分がいたのかもしれない。この「自分が最も嫌う行為を自分自身がしてしまっていた」というパラドックスが、この小説を謎めかせているのだと思う。

おそらく、主人公を固定化しない形でしか表現できない物語だったのであろう。

※「少年の日の思い出」は、1911年に発表された『クジャクヤママユ』を、20年後、ヘッセ自身が改稿し、ドイツの地方新聞の1931年8月1日号に短編小説として掲載したものだという。初稿の「クジャクヤママユ」と「少年の日の思い出」において、何が違うのか、その検証は行っていない。もしも、そこに違いがあり、今回取り上げた構成上の謎となる事柄が加えられていたなら、後に、時世にそぐわぬとドイツ国内で紙の割り当てを禁止され、書くことを奪われてしまうヘッセにとって、忍び寄る社会の圧力を敏感に感じ取り、主観（主人公）をはぐらかす形にして、短期勝負の新聞に載せたものなのかとも思うしだいである。